



研究者名※	林 悠子	学位※	博士(文学)
所属※	文学部 日本文学科	職名※	准教授
連絡先	hayashiy@fc.jwu.ac.jp		
URL	http://www.		
researchmap※	https://researchmap.jp/hayashiy-1		
研究分野※	日本文学		
研究キーワード※	古代文学		
共同研究・競争的 資金等の研究課題			
社会貢献・産学官 連携活動等			
受賞歴	日本女子大学教員研究奨励金(2020年度)		

研究領域	古代文学	(SDGs)
研究テーマ※	平安朝作品にみる貴族たちのしぐさとふるまいに関する研究	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】</p> <p>平安貴族の生活様式や立ち居ふるまいは、身分や性差の制約を受け、現在とは大きく異なるものも多い。本研究では、平安期文学作品や公卿日記を用いた調査を通じて、貴族たちのしぐさやふるまいの実態とそれらに対する同時代の人々の価値判断を明らかにしようとしている。また、貴族たちのしぐさとふるまいが文学作品内に描かれることの意義や効果についても考察を行っている。</p> <p>例えば平安貴族男性が人前で「泣く」ことは、貴族的な細やかな感情の発露として、概ね好意的に評価された。一方、平安中期の貴族女性たちは、原則「立たない・歩かない、家族以外に顔を見せない・声を聞かせない」ことが「たしなみ」とされた。このような、平安貴族のしぐさとふるまいとそれに対する同時代人の受け止め方は、専門家・愛好家には読書体験的に知られていることではあるが、詳細な調査・研究は必ずしも多くない。</p> <p>本研究では、平安貴族のしぐさとふるまいのうち、特に現代とは受け止められ方が異なるものに注目し、用例を集めて詳細な検討を行っている。</p> <p>【応用例、研究の展望】</p> <p>原則「歩かない」とされている平安貴族女性が例外的に「歩く」ケースとして、寺社詣の際の「徒歩詣(かちもうで)」がある。「歩く」という苦行を通じてより大きな利益を得られるという発想である。『蜻蛉日記』にも作者の藤原道綱母が、石山寺参詣の際に都から石山寺まで歩き通したとする記述があるが、果たして普段「歩かない」貴族女性に可能だったか。今後は、他文献に見られる、京都近郊への寺社詣の記述を調査し、日記文学の虚構性の問題と併せて、考察を行う予定である。</p> <p>上流貴族女性が、「家族以外に顔を見せない・声を聞かせない」習慣は、9世紀末から10世紀初頭ごろに始まったとする指摘がある。平安貴族に特異なしぐさとふるまいについては、歴史的な変遷も明らかにしたい。</p>	
本研究関連 特許・論文等	<ul style="list-style-type: none"> ・林悠子(単著)「平安貴族女性が歩くとき」日本女子大学文学部日本文学科高野研究室内瞿麦会、『瞿麦』第三十号、2016年3月 ・林悠子(単著)「サイデンステッカー一訳『源氏物語』正篇の〈涙〉」藤原克己監修・高木和子編『新たなる平安文学研究』、2019年10月、青簡舎 ・林悠子(単著)「サイデンステッカー一訳『源氏物語』続篇の〈涙〉」『国文目白』2021年2月 	
共同研究・外部機関 との連携への期待	・	